

# 富士五湖地域における 観光開発と水辺空間・利用の変化

上林 就<sup>1</sup>・五三 裕太<sup>2</sup>・谷川 晃介<sup>3</sup>・福島 秀哉<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 非会員 東京大学工学部社会基盤学科

(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1, E-mail: kanbayashi@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>2</sup> 学生会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1, E-mail: itsumi@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>3</sup> 非会員 東京大学工学部社会基盤学科

(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1, E-mail: tanikawa@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>4</sup> 正会員 博士(工) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1, E-mail: fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

富士五湖湖畔に位置する集落において、住民による水辺空間の利用は、生活・生業・集落形成上重要な役割を担ってきた。しかし戦前戦後から始まった観光開発が進んだ現在では、集落と水辺の関係は大きく変化している。特にキャンプ場・別荘地等の観光開発に伴いインフラ整備が急速に進んだ地域では、湖畔周遊道路の整備等により水辺空間そのものが大きく変化し、住民・観光客の水辺利用のあり方へも大きく影響したと考えられる。現在の富士五湖周辺の水辺空間と利用形態の多様性は、これらの変化の蓄積の結果とみることができるが、そのマクロな傾向や特徴についての知見の蓄積は十分とはいえない。本研究は富士五湖の湖畔集落を対象に、近代化における水辺空間の変化と観光開発・インフラ整備の影響を整理し、断面構成の変容と地形の影響に着目してその傾向を明らかにするとともに、水辺利用の変化との関係を示すことを目的とする。

**Key Words :** 富士五湖, 観光開発, インフラ整備, 水辺, 断面

## 1. はじめに

### (1) 背景・目的

水辺空間は漁に代表される生業の場として、更に日常生活利用の場として地域住民による多様な利用がなされ、集落の形成や発展において重要な役割を担っていた。しかし近代化に伴う水道や道路といった社会基盤の整備は、集落と水辺の関係を空間的にも社会的にも変化させ、特に観光開発のような広域的な計画に基づく基盤整備が行われた地域では、急速な空間変容により、水辺利用にも大きな影響があったと考えられる。

自然発生的な集落の形成および近代的な社会基盤の整備に対しては、地質・地形は様々な面から影響を及ぼしている。しかし、集落の生活に関わる利水・治水的な要因や土地利用のポテンシャルに規定されやすい自然発生的な集落の形成と、多様な主体の計画意図を含み、かつ多くの困難の解決が可能になった近代的な技術を伴う空間整備とでは、地質・地形から受けた影響に差があると考えられ、水辺利用の変化はその差が顕在化した事象とも捉えることができるが、その関係性は明らかでない。

### (2) 対象地：富士五湖地域

以上の背景をもとに、近世以前から各湖の湖畔に複数の集落が形成され、昭和初期から高度経済成長期にかけてキャンプ場・別荘地等としての観光開発が盛んに行われた富士五湖地域を本研究の対象地とする。

富士五湖地域は、富士山北麓の山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖周辺一帯を指し2013年には富士山と共に世界文化遺産にも登録された日本有数の観光地である。1960年頃から湖畔周遊道路等のインフラ整備が急速に進んだことで、水辺空間そのものが大きく変化しており、現在の富士五湖周辺の水辺空間とその利用は、親水公園や湖畔駐車場等の基盤整備の有無や、ボートや釣り等の営業の有無など、地区ごとに多様な形態がみられる。

各湖の富士山側は、噴火の溶岩流によって形成された地形が広がり(図-1)、その上に形成された集落では農業に不向きな地質的特徴から、山稼ぎや街道による駄賃稼ぎを主な生業としていた。一方、富士山の対面側には谷底平野が散見され、そこでは水田等の農業利用も確認されるなど、狭い範囲に異なる地質・地形的な特徴がみられる地域である。

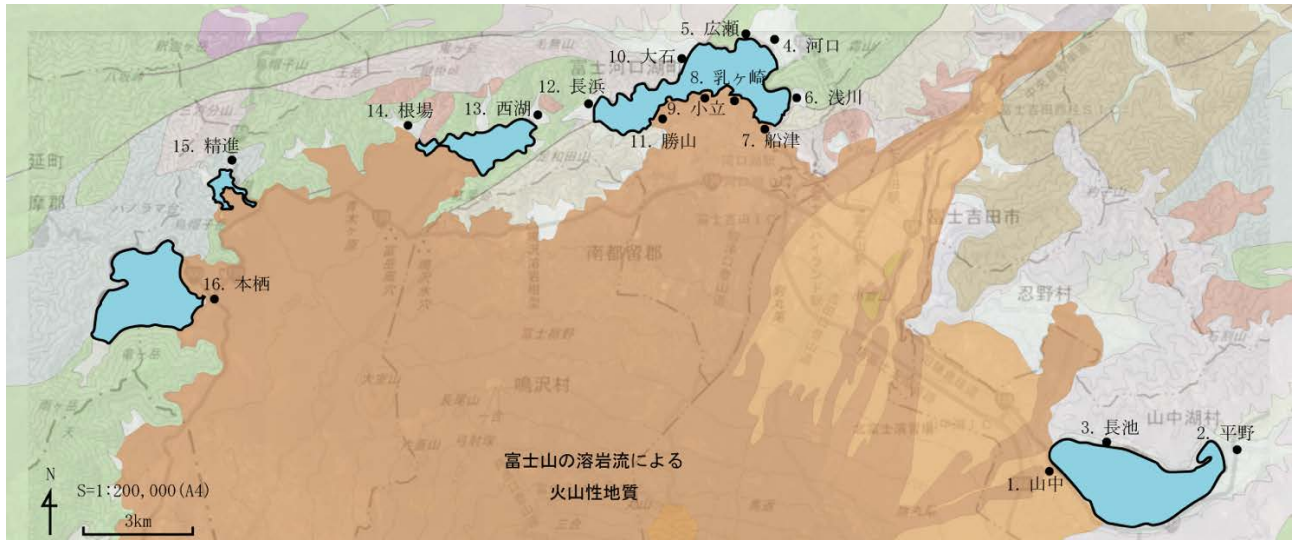


図-1 富士五湖地域の地理的概要と対象 16 集落(地理院地図と地質図 Navi をベースに作成)

### (3) 目的

以上から、本研究は富士五湖地域の湖畔に形成された複数の集落を対象に、地質・地形に着目することで、観光開発前の集落の形成および観光開発に伴った空間変容の特徴を明らかにし、水辺利用の変化との関係を示すことを目的とする。

### (4) 既往研究

富士五湖地域の集落形成や観光開発を対象とした研究には、山中湖村の山中、平野、長池地区を対象に近代化に伴った空間変容の特徴を明らかにした福島(2017)<sup>1)</sup>や、富士五湖地域の観光開発についてその経緯を明らかにした内藤(1998)<sup>2)</sup>、観光行動の特徴を明らかにした杉本・小池(2015)<sup>3)</sup>などがある。しかし、観光開発による空間変容の多集落横断的な傾向や、水辺利用の変化との関係は明らかになっていない。

また、集落形成やインフラ整備と地質・地形的特徴の関係に着目した研究はその歴史が古く、弥生時代の集落立地を対象にその特徴の解明を試みた高橋(1975)<sup>4)</sup>や、日本全国のマクロな傾向から地形と土地利用の関係を示した瀬戸(1986)<sup>5)</sup>が存在している。また、近年では飯村・平沢(2012)<sup>6)</sup>が水と地形から集落発生位置の予測を試みている。しかし、自然発生的な集落形成と近代的な観光開発の両者の側面から、基盤整備と地質・地形的な特徴の関係を明らかにすることを試みた研究はない。

### 5) 本研究の手法と構成

本研究では、地質・地形的な特徴および、水辺と集落の関係に着目する手法として、水辺から集落にかけての断面的な空間把握(以下、断面的特徴)による分析を試みる。

第2章では、文献調査から富士五湖地域における昭和期以降の観光開発の概要を整理し、旧版地形図を用いた

対象集落および断面の選定を行う。

第3章では、地質図Navi(産業総合技術総合研究所)をもとに、地質・地形的な特徴から対象集落を3つに分類し、旧版地形図と地理院地図(電子国土Web)から、観光開発前の各集落の断面的特徴を整理することで、地質・地形的な特徴と集落形成の関係を分析する。

第4章では、現在の集落の断面的特徴を整理し、前章との比較を行うことで、地質・地形的な特徴の共通する集落ごとに空間変容の特徴を示す。更に各地区の断面図を作成し、観光開発に伴う空間変容の特徴を断面形状から分析する。

第5章では、各集落で現在みられる水辺空間の観光利用の形態を比較することにより、観光開発に伴う空間変容と水辺利用の変化との関係を考察する。

## 2. 観光開発の概要と対象集落・断面の選定

### (1) 富士五湖地域の集落形成と観光開発の概要

富士五湖地域は、南方の鎌倉と北方の甲府および日本海側を結ぶ鎌倉時代以来の街道上に存在している。近世以前には防衛上、商業上の交通の要所として、山稼ぎや街道での駄賃稼ぎを主な生業とした集落形成がされた。

しかし近代以降、道路、中央本線、馬車鉄道類の開通に伴い1917年に実業家を発起人とした富士山麓開発に関する議論が行われ、1924年に岳麓開発調査委員会の設置がされるなど、観光開発事業の構想が開始される。

昭和に入ると1929年の富士山麓電鉄(現富士急行電鉄)開通をはじめとした道路等の基盤整備が行われ、1936年の富士箱根国立公園の設立、戦後の米兵相手のビジネスの展開、1947年の県の観光企画室の設置、翌年の観光課の独立、1963年の富士北麓開発基本計画の策定と観光開発に拍車がかかる。1961年に富士スバルライン、1967年



に御坂トンネル，1968年に河口湖大橋の建設と，民間資本を積極的に取り入れた急速な開発により1970年代までに観光の基盤となるインフラの建設が進行した<sup>7</sup>。

その後，富士北麓の観光客数は1970年の約1100万人から1990年の約1600万人まで増加し，周辺人口に関しても山中湖村では約4000人から約5000人まで増加するなど，平成初期にかけて，観光産業の発展やそれに伴う人口増加がみられた<sup>3</sup>。現在にかけては，観光客数，人口共に増減は横ばいである。

## (2) 対象集落と断面の選定

前節の内容を踏まえ，観光開発による道路等の空間整備が行われる前である1928-1929年に製作された旧版地形図を用い，観光開発前に湖畔に形成されていた全16集落を本研究の対象集落に選定した。図-1には，対象集落の位置を示している。更に，各集落を代表する断面は，旧版地形図で確認された各集落の居住地の中心部を通り，湖畔に直交する断面を用いることとする。

## 3. 地質・地形的特徴による分類と集落形成

### (1) 地質・地形的特徴による16集落の分類と旧道

既に1章でも触れた通り，富士五湖地域の地質は大まかには富士山側か否かの違いによって，富士山の溶岩流による火成岩地質と堆積岩および付加体に大別できる。火成岩地質上には，対象16集落のうち6集落の形成が確

認される。一方で，堆積岩，付加体上には10集落の形成が確認され，いずれも谷底平野上であった。

地質の差による広域的な地形との関係が考えられ，観光開発前の集落(以下：旧集落)の形成との関係が考えられる要素として，道路がある。旧版地形図から，いずれの旧集落にも，主要なる県道，国道および道幅1m以上の町村道のうち，他集落との接続が確認された道路(以下：旧道)の存在が確認される。

富士山の溶岩流が形成した火成岩地質上では，旧道は富士山を中心とした等高線に沿うように，湖の形に対して凸な形状，あるいは沿うような形状で形成されている。一方集落が山に囲まれた谷底平野では，湖側に平野が開けている場合と狭まっている場合の2種類で，異なる旧道と湖の関係があり，平野が開いている場合は旧道が湖の形に対して凹な形状をとる一方で，平野が湖に対して狭まっている場合は旧道が湖側から集落を通り背後の山地の間へと抜けている。

以上から対象16集落は，地質図をもとにした地質・地形的特徴によって，火成岩地質上に形成された6集落(以下：火成岩集落)，湖に開けた平野上に形成された7集落(以下：開平野集落)，湖側に狭まっている平野上に形成された3集落(以下：狭平野集落)の3つに分類(図-2)ができ，それぞれで旧道と湖の関係に差があることがわかる。

### (2) 地質・地形的特徴と旧集落の形成

前節で分類した地質・地形的特徴の異なる集落では，旧道と湖の関係に差があることで，旧集落の形成の特徴




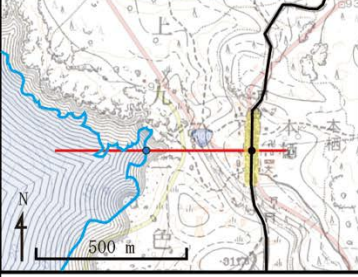
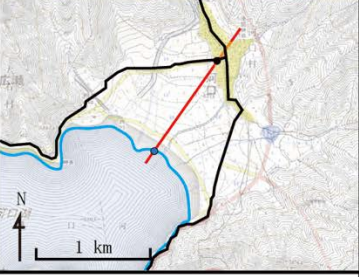
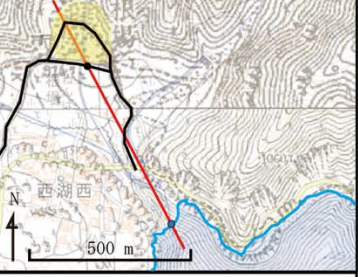
分類名	火成岩集落	開平野集落	狭平野集落
分類された集落	1. 山中, 7. 船津, 8. 乳ヶ崎 9. 小立, 11. 勝山, 16. 本栖	2. 平野, 3. 長池, 4. 河口, 5. 広瀬 6. 浅川, 10. 大石, 12. 長浜	13. 西湖, 14. 根場, 15. 精進
地質図			
断面の選定 旧集落・旧道 水涯線の位置			
旧道の湖との関係	湖の形に対し，凸な あるいは沿うような形状で形成	湖の形に対し凹な形状	湖側から集落を通り，山地の間へ抜ける

図-2 地質・地形的特徴による対象 16 集落の分類

に異なる異なる特徴が考えられる。対象16集落の湖と旧道、旧集落の関係を表す特徴として、旧集落の湖畔側の端における湖面との高低差と、湖畔に最も近い旧道の水涯線からの勾配の関係を示す(図-3)。なお、各集落におけるそれぞれの値は、旧版地形図から旧集落の範囲、旧道の位置を読み取り、現在の地形図に重ねることで、地理院地図(電子国土Web)の標高と水涯線のデータから測定した(図-4)。

すると火成岩集落では、湖面と旧集落との高低差にはばらつきがみられた一方、旧道の水涯線からの勾配にはばらつきが小さい傾向がみられた。他方、開平野集落では、旧道の水涯線からの勾配にはばらつきがみられた一方で、湖面と旧集落の端との高低差にはばらつきが小さい傾向がみられた。狭平野集落では、いずれの値も比較的ばらつきが小さい傾向がみられ、開平野集落と比較して湖面から高い位置で集落形成されたことが読み取れる。

開平野集落では、旧道が湖の形に凹な形状で形成されており、集落を可能な限り湖側に立地させることが旧道形成上合理的である。そのため、水位の変動によって浸水することのない限界の高低差で集落形成が図られ、集落ごとの湖畔と旧集落の高低差にはばらつきが少ない傾向がみられたと考えられる。

一方で火成岩集落では、富士山を中心とした等高線に

沿って形成された旧道に、また狭平野集落では、背後の山地に抜けていく旧道によって、集落形成の立地が定められたために、比較的湖面から高い位置での集落形成がされたと考えられる。

### (3) 小結

本章では対象16集落を地質図をもとに地質、地形的特徴から3つに分類し、旧道と湖の形の関係に異なる特徴を示した。更に湖と旧道、旧集落の関係を表す特徴として、旧集落の湖畔側の端における湖面との高低差と、湖畔に最も近い旧道の水涯線からの勾配に着目することで、地質・地形的特徴の異なる集落間で集落形成の特徴に差が見られる傾向を明らかにした。

## 4. 観光開発に伴う空間変容と断面形状

### (1) 観光開発に伴う湖畔道の整備と集落立地の拡大

前章では旧集落の湖面からの高さや旧道の水涯線からの勾配に着目して、観光開発前の集落形成と地質・地形的な特徴との関係を示した。一方、現在の地形図と旧版地形図を比較すると、湖畔沿いに新設道路(以下：湖畔道)が整備され、それに伴って湖畔側へ集落空間が拡大

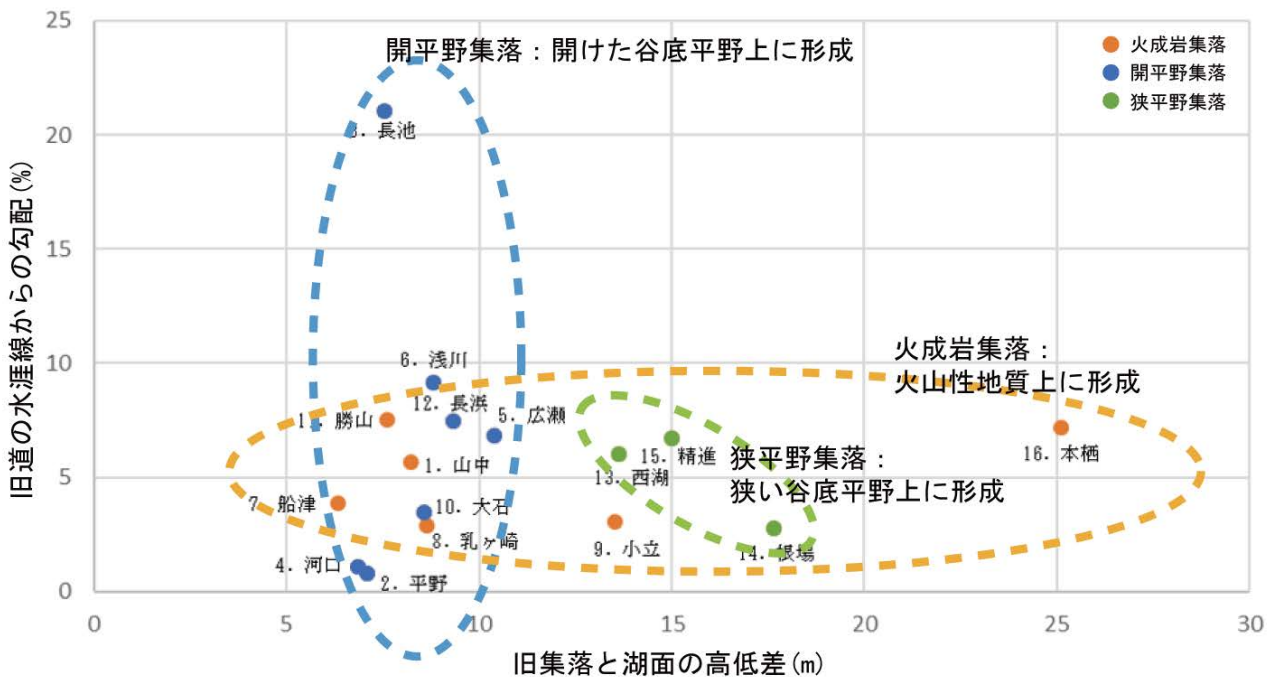


図-3 対象 16 集落の観光開発前の集落形成の特徴

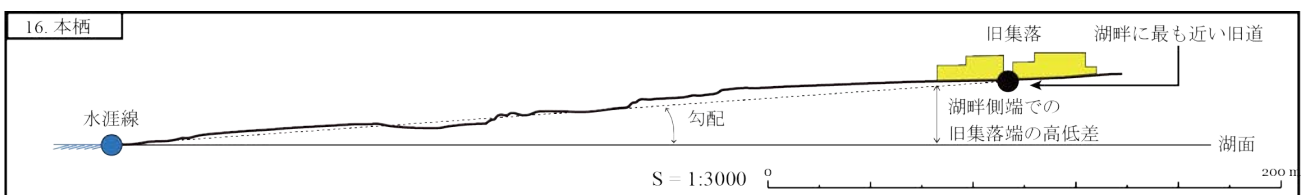


図-4 旧集落の湖畔側の端における湖面との高低差と、湖畔に最も近い旧道の水涯線からの勾配の測定例(図-2の事例から)

している。観光開発前にみられた湖と旧集落、旧道との関係は、観光開発を経て現在の集落、湖畔道との関係に変化したと考えられる。

そこで、観光開発後の集落における断面的な特徴を、現在の集落と湖畔道に着目して分析し、前章のとの比較から、観光開発に伴う空間変容の特徴を分析する。

## (2) 空間変容と地質・地形的特徴の関係

対象16集落について、前章の手法と同様に、今度は現在の集落の湖畔側の端における湖面との高低差と、湖畔道の水涯線からの勾配を整理した(図-5)。以下では、前章で示した地形・地質的な特徴の異なる集落群ごとに、その傾向を分析する。

### a) 火成岩集落

火山性地質上に形成された6集落は、観光開発前の集落形成において、水涯線から旧道までの勾配にばらつきが小さいという傾向が示されていたが、水涯線から湖畔道の勾配は、その値が水涯線から旧道の勾配と比較して大きく異なる集落(山中, 船津, 乳ヶ崎:以下, 火成岩集落-1)とその差が小さい集落(小立, 勝山, 本栖:以下, 火成岩集落-2)の2つに分かれることが読み取れる。

### b) 開平野集落

開けた平野上に形成された7集落は、観光開発前の集落形成において、湖面から旧集落までの高さにばらつきが小さいという傾向が示されていたが、旧集落と現在の集落を比較すると、湖面からの高低差が大きく変化し、湖へ近づいた集落(平野, 河口, 大石:以下, 開平野集落-1)と、大きな変化のみられない集落(長池, 広瀬, 浅

川, 長浜:以下, 開平野集落-2)に分かれる。また図-3より、開平野集落-1は開平野集落-2に比較して、水涯線から旧道の勾配が小さい。

### c) 狭平野集落

狭い平野上に形成された7集落には、観光開発前の断面的な特徴のばらつきが比較的小さく、開けた平野上に形成された集落と比較して高い集落形成がなされた傾向が示されていた。観光開発後も依然として特徴のばらつきが比較的小さいが、集落と湖面の高低差が減少している。

## (3) 断面図の作成による断面形状の把握

前節から、地質・地形的特徴が同じ集落間にも異なる空間変容の特徴がみられることが示されたため、以下では各集落の詳細な断面形状から、観光開発に伴う空間変容の差が生じた背景を分析する。そこで、対象16集落の各断面に対し、地理院地図(電子国土Web)の断面図作成ツールを用いることで各断面の現在の断面形状を記述し、各集落の断面上に、集落空間の範囲、旧道と道路整備を年代ごとに表現した断面図を作成した。なお作成にあたっては、観光開発による基盤整備が行われる前の昭和初期(A.観光開発前)に加え、基盤整備の進行後である1970年代末(以下:B.基盤整備後)、観光客や人口の増加など観光利用が進行した後の1990年頃(以下:C.観光地化後)とD.現在の4年代の旧版地形図(表-1)を用いた。また、集落空間の拡大には密度の違いがみられたため、連続的と離散的の2つの表現方法を用いて区別した(図-6)。

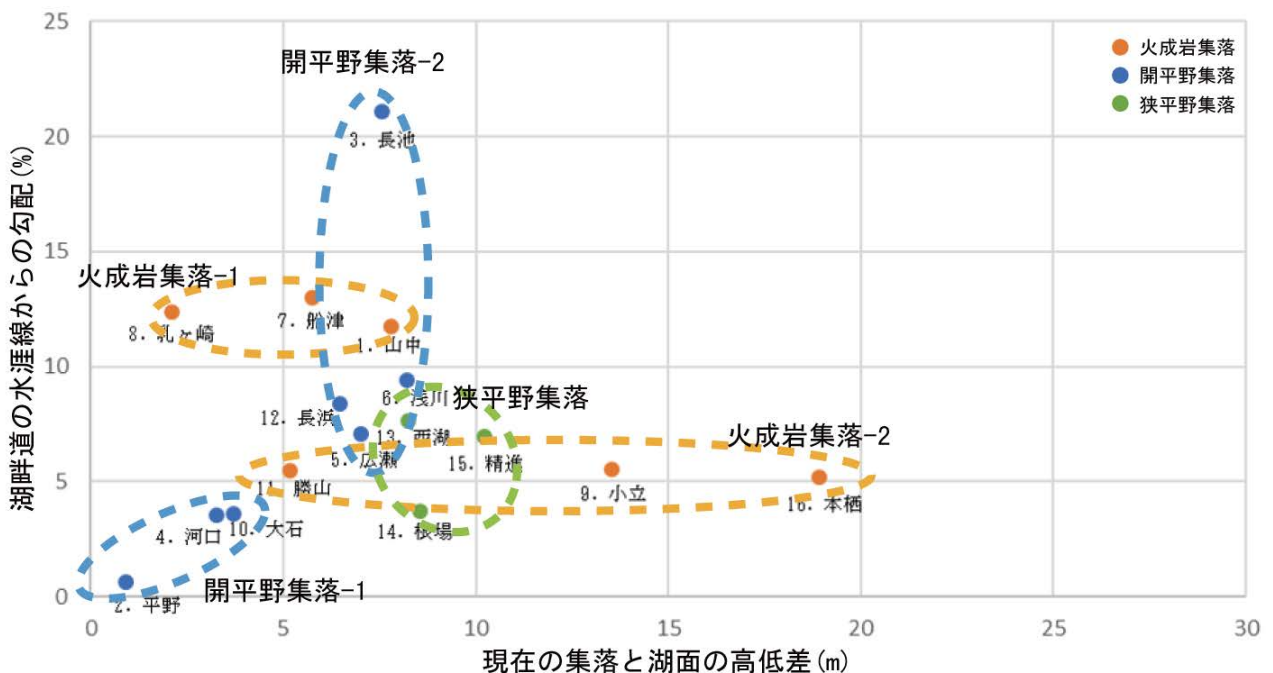


図-5 対象 16 集落の現在の集落空間の特徴



(4) 空間変容と各集落の断面形状の関係

作成した断面図(図-7, 8, 9)をもとに、地質・地形的特徴が同じ集落郡ごとに、観光開発に伴う空間変容と断面形状の関係を分析する。

a) 火成岩集落

異なる空間変容の特徴が見られた2つの集落郡のうち、観光開発により水涯線から湖畔道までの勾配が大きい傾向がみられた火成岩集落 -1の3集落では、いずれも水涯線近くで上に凸な形状の急で大きな高低差を生じているものの、それより内陸部は旧集落までほぼ平坦のなだらかな地形が続き、旧集落から湖畔道への集落拡大がみられる。他方、水涯線から湖畔道までの勾配が小さい傾向が見られた火成岩集落 -2の3集落では、湖畔から湖畔道までは下に凸の緩やかな勾配であるものの、湖畔道から旧集落にかけて勾配が急となっており、旧集落から湖畔道までの連続的な集落拡大がみられない。

b) 開平野集落

異なる空間変容の特徴が見られた2つの集落郡のうち、湖面から集落までの高さが観光開発を経て変化した特徴を持ち、旧道の水涯線からの勾配が小さい開平野集落 -1の3集落の断面形状を詳細にみると、旧集落から湖畔ま

でほぼ平坦な地形が続いており、旧集落から湖畔へと集落が大きく拡大していることがわかる。一方で、湖面と旧集落の高低差が大きく、湖畔に近い旧集落の立地がみられる開平野集落 -2の4集落の断面形状では、湖畔からの陸までに平坦で開けた土地がなく、集落拡大が限定的となっている。

表-1 使用地形図一覧

図郭名	A.観光開発前	B.基盤整備後	C.観光化後	D.現在
河口湖西部	1929 二修	1977 修正	1989 修正	地理院地図 (電子 国土Web)
河口湖東部	1929 修正	1977 修正	1989 修正	
鳴沢	1928 測図	1977 修正	2006 更新	
富士吉田	1929 鉄補	1977 修正	1988 修正	
須走	1928 要修	1977 修正	1988 修正	
御正体山	1929 測図	1977 修正	1988 修正	
駿河小山	1928 要修	1977 修正	1988 修正	
精進	1928 測図	1977 修正	1998 部修	

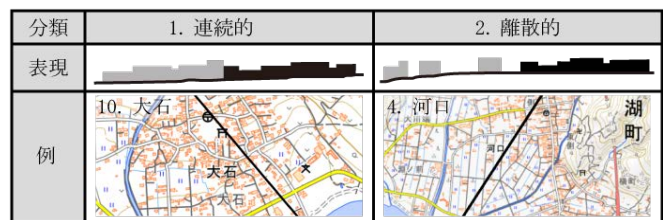
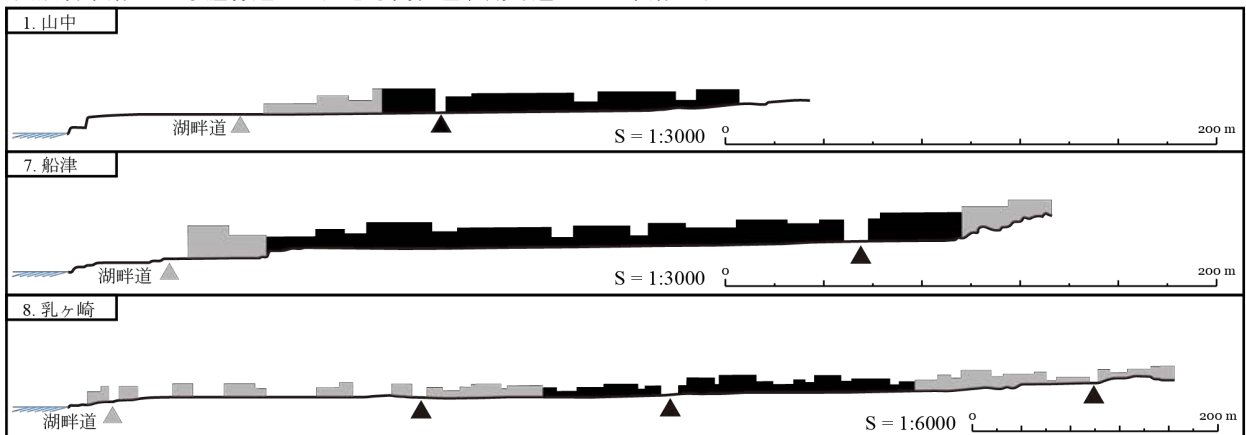
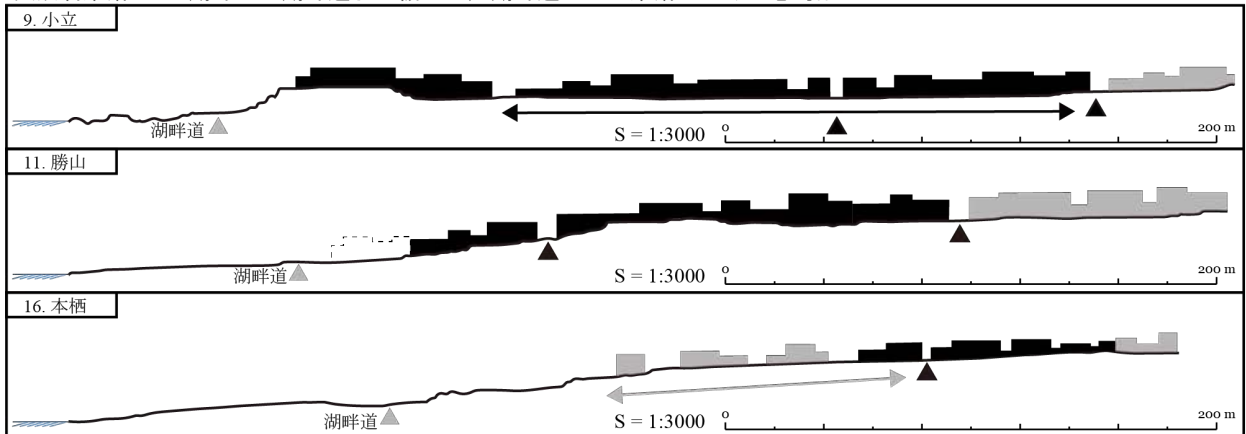


図-6 集落拡大の表現

火成岩集落 -1：水涯線近くに大きな高低差、湖畔道から旧集落が平坦



火成岩集落 -2：湖畔から湖畔道まで緩やか、湖畔道から旧集落にかけて急勾配





凡例  
 昭和初期の段階で確認：  集落     道路     断面に平行な道路  
 高度経済成長後段階で確認：  集落     道路     断面に平行な道路  
 平成初期の段階で確認：  集落     道路  
 現在の段階で確認：  集落     道路

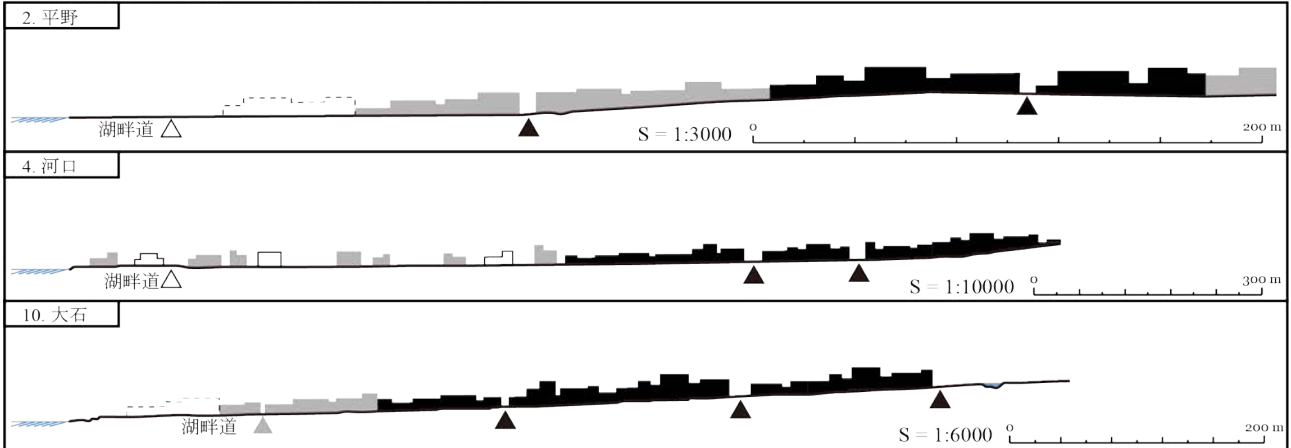
図-7 火成岩集落の断面図と空間変容

c) 狭平野集落

狭い平野上に形成された集落の観光開発に伴う空間変容は、湖面から湖畔道の間がなだらかで、低密度な集落拡大が見られた根場(以下他の記述と合わせるため、狭平野集落 -1)と、湖面から湖畔道間に急な箇所が存在

し、高密度な集落拡大がみられた西湖、精進(以下：狭平野集落 -2)で異なる。根場では集落拡大が低密で部分的となっている一方で、西湖と精進では高密度な集落拡大がみられる。

開平野集落 -1: 旧集落から湖畔までがほぼ平坦



開平野集落 -2: 湖畔から旧集落の間の勾配が比較的大きく、平坦な土地が小さい

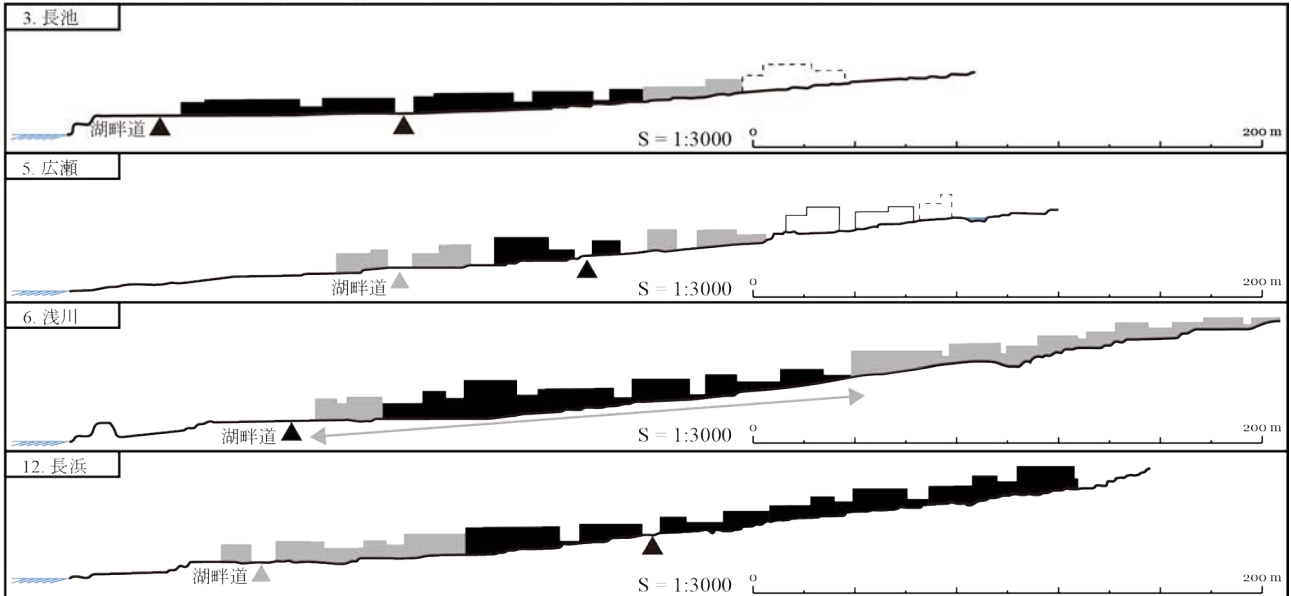


図-8 開平野集落の断面図と空間変容(凡例は図-7と同様)

狭平野集落 -1: 湖畔から湖畔道がゆるやかで平坦



狭平野集落 -2: 湖畔から湖畔道までの湖面付近に勾配が急な箇所が存在

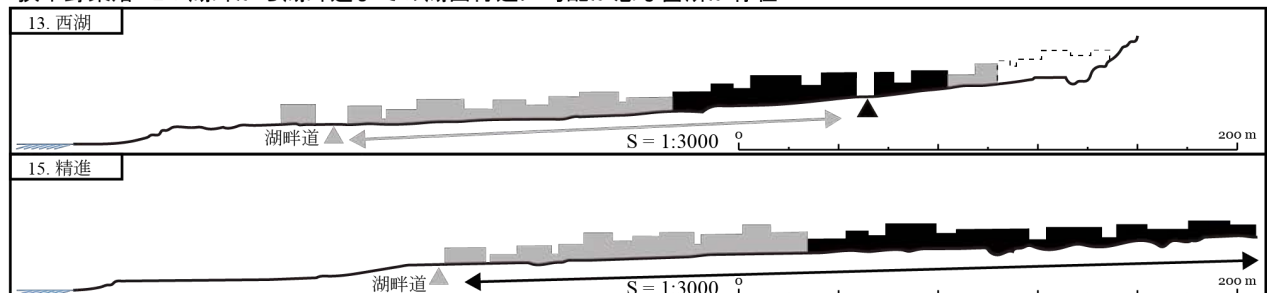


図-9 狭平野集落の断面図と空間変容(凡例は図-7と同様)

(5) 小結

本章では観光開発後に整備された湖畔道および集落の湖畔側への拡大に着目し、同じ地質・地形的特徴を有する集落の間で異なる観光開発前後の空間変容の特徴がみられることを示した。

その上で、そのような空間変容の差が生じた背景を、断面図の作成による断面形状の違いの把握から分析し、同じ地質・地形的な特徴の集落を、その空間形状の違いから2つずつに分類した。次章では、現在の水辺の観光利用について、観光開発による空間変容の差との関係を考察する。

5. 水辺の観光利用の特徴

(1) 地質・地形的特徴が同じ集落での観光地化の差

各集落で現在みられる水辺の観光利用の形態と、観光開発による空間変容の特徴との関係を、地質・地形的な特徴が同じ集落ごとに、その傾向について分析する。

a) 火成岩集落

旧集落から湖畔道への連続的な集落拡大がみられた火成岩集落 -1の3集落のうち、山中、船津では湖畔道の湖畔側には駐車場や湖畔遊歩道が整備がされ、湖畔道の両側で水辺空間の観光地化の進展がみられるなど、それぞれ山中湖、河口湖を代表する観光エリアとなっている。一方、旧集落から湖畔道への連続的な集落拡大がみられなかった火成岩集落 -2では、山中、船津でみられるような湖畔付近の観光目的の空間整備はなく、観光地化があまり進んでいない。ここから、水辺の観光地化と旧集落から湖畔道への集落拡大の関係が示唆される。

ただし、火成岩集落 -1のうち乳ヶ崎では、旧集落から湖畔道への集落拡大はみられるものの、観光地化の進展があまりみられない。乳ヶ崎と山中、船津の間で、旧集落の立地の特徴が異なり、内陸側に旧集落の立地がみられた乳ヶ崎では、集落拡大の密度が低くなっている。旧集落が湖畔の比較的近くに立地し、湖畔道に対して高い密度で集落拡大が可能だった集落形成の特徴が、山中、船津の観光地化の進展に重要な要素であったと考えられ

る。

b) 開平野集落

旧集落から湖畔への大きな集落拡大がみられた開平野集落 -1について、河口や大石では水辺空間に観光客向けの親水公園や商業施設が、平野では浜に多くのボート屋がみられるなど、水辺でのアクティビティを活用した観光地化の進展がみられる。比較的開けた土地に大きく集落拡大がされる中で、観光目的の土地利用転換が大規模に行いやすく、観光地化が進展したと考えられる。一方で、旧集落と湖畔の間に開けた土地が少なく大きな集落拡大がみられなかった開平野集落 -2では、観光向けの水辺での営業利用は少なく湖畔近くの駐車場の整備にとどまるなど、水辺での観光利用は前者と比較して限定的である(図-11)。例えば、富士山の視点場として多くの観光客が訪れる長池の湖畔道沿いであるが、大きくは集落拡大がされず観光向けの土地利用転換が行われなかったため、観光地化が進行しなかったと考えられる。以上より、火成岩集落同様、水辺の観光地化と旧集落から湖畔への集落拡大の関係が示唆される。

c) 狭平野集落

狭平野集落では、3集落のいずれでも水辺での観光営業は多くみられず、観光地化の進展はあまりみられない。旧集落の立地に着目すると、狭平野集落では開平野集落に比べ比較的的内陸での集落立地がみられる。火成岩集落 -1の中で、旧集落の立地が比較的的内陸にみられた乳ヶ崎に観光地化があまり進まなかった傾向からも、旧集落の立地と湖との距離が観光地化に与えた影響が示唆される。

なお、湖畔道と湖面の間が緩やかな勾配となっている狭平野集落 -1の根場では湖畔道沿いに駐車場や公園が整備されている一方で、湖畔道と湖面の間が急である狭平野集落 -2の西湖と精進では駐車場の整備はなく(図-11)、湖畔道から湖畔での空間整備の有無と、断面形状の差に関係が示唆される。

(2) 集落拡大と観光地化の関係と、開発主体の意図

前節では、火成岩集落と開平野集落において、水辺の



図-10 火成岩集落に見られる水辺の観光利用の差

図-11 開平野集落に見られる水辺の観光利用の差



観光地化と旧集落から湖畔、あるいは湖畔道への集落拡大の関係を示唆した。また、火成岩集落-1の山中・船津と乳ヶ崎、更に開平野集落と狭平野集落の比較から、旧集落の立地と湖との距離が水辺の観光地化に与えた影響が示唆され、富士五湖地域の水辺の観光地化の進展における旧集落立地の重要性が考察される。

その背景には、富士五湖地域の観光営業が、地域住民主体で行われていることが挙げられる。旧集落から湖畔、あるいは湖畔道への集落拡大が大きく行われ中で、地域住民が主導する水辺の観光利用が進展し、観光地化の度合いに影響を与えたと考えられる。

他方、このような旧集落から湖畔側への集落拡大は、自然発生的に起きると考えづらい。例えば山中、船津では近代的な技術を伴った盛土造成による湖畔道の整備と、水辺空間の平坦な土地への改変により、旧集落から湖畔道に集落拡大が図られた。しかし、そのような近代技術を伴った造成による整備は、地域住民主導での実現が困難であり、開発主体の計画意図の影響を受けている。

開発主体にとって、山中、船津はそれぞれ山中湖、河口湖の集落のうち、大月から富士五湖地域に入る際の玄関口となる集落で、広域の視点からみたときの集落立地が観光地化に適していた。また住民人口に着目すると、山中と船津はそれぞれ山中湖村、富士河口湖町の中で最大の人口規模であり、地域住民による観光地化のポテンシャルが高く評価された地区だと考えられる。このような開発主体の評価が、観光開発による大規模な造成と道路整備を実現し、集落における水辺利用が自然発生的な形と大きく異なる形へと変容したと考えられる。開発主体の計画意図やその影響の詳しい分析は、今後の課題としたい。

### (3) 小結

本章では、異なる地質・地形的特徴ごとに、現在の水辺の観光利用の特徴を示し、富士五湖地域の水辺の観光地化の進展における旧集落立地の重要性を示唆した上で、その背景に富士五湖地域の観光営業が地域住民主体で行われていることを挙げた。

一方で山中と船津を例に、そのような集落拡大が開発主体による近代技術による造成によって支えられていることを指摘し、観光地化のポテンシャルが高い地区で、集落の水辺利用が自然発生的な形から大きく異なる形へ変化した可能性が考えられる。

## 6. おわりに

### (1) 本研究の成果

本研究は、観光開発による基盤整備が行われる前の旧

版地形図を用いて選定した、富士五湖地域の16集落について、各集落を代表する断面を選定し、断面的な空間の特徴から集落形成、観光開発による空間変容、更に水辺利用の変化の分析を試みた。その成果として、

- ・集落を地質、地形的特徴から対象16集落を3つに分類し、旧道の形成、および観光開発前の集落形成の特徴に差が見られる傾向を示した(第3章).
- ・観光開発による湖畔道の整備、およびそれに伴う集落の拡大といった空間変容が、同じ地質・地形的特徴を有する集落の間でも異なる特徴がみられることを示し、詳細な断面形状の差との関係から集落を更に6つに分類した(第4章).
- ・観光開発による空間変容と水辺の観光地化の進展の差の傾向を示し、富士五湖地域の水辺の観光地化の進展における旧集落立地の重要性を示唆した(第5章).

### (2) 今後の課題

今後の課題は、以下の通り。

- ・断面的な空間の特徴と、集落形成や観光開発に伴った空間整備との関係について、富士五湖以外の地域でも同様の分析を行い、本研究の示した分類の妥当性を検証すること。
- ・より詳細に水辺の観光利用を調査することにより、観光営業の様子にとどまらず、湖畔道から湖畔にかけての空間整備にも着目することで、その全体的な特徴や傾向を示すこと。更に、計画主体の意図を含んだ調査・分析を行うこと。
- ・観光開発前の日常生活における水辺利用に関する調査を行い、水辺利用の変化そのものについて地質・地形的な特徴および断面形状の特徴との関係を分析すること。

**謝辞**：山中湖村役場の職員方をはじめとする、山中湖村の村民のみなさまに感謝を述べ、謝辞といたします。

### 参考文献

- 1) 福島秀哉：山中湖村における集落空間の近代的変容と村落共同体の領域形成に関する研究- 共同体の特徴を考慮した生活空間の計画論構築に向けて、東京大学博士論文-2017.
- 2) 内藤嘉昭：富士北麓の昭和初期における社会変動と観光開発、奈良県立商科大学「研究季報」第9巻第2-4号-1998.
- 3) 杉本興運、小池拓矢：富士山麓地域における観光行動の特徴—着地からの旅行距離に着目して—、地学雑誌、pp-1015-1031、Vol-124、No.6-1962., pp-110-119-2015.
- 4) 高橋誠一：弥生時代の集落立地、人文地理、第27巻-2号、pp-113-144-1975.
- 5) 瀬戸玲子：日本における地形分類別土地利用、地図、

第 24 巻, 4 号 pp-1-11-1986.

- 6) 飯村健司, 平沢岳人: 集落と街道の生成—都市・集落を形成するアルゴリズム—, 日本建築学会技術報告書, 第 18 巻, 第 40 号, pp-1047-1050-2012.
- 7) 富士急行株式会社: 富士山麓史-1977.

(2019. 10-4 受付)